

嘆きの中間マーケット

(中小企業ノンバンク繁栄の意味するもの)

あなたは日本一高い株価の会社を知っていますか？

昨年「株価は何でも知っている」と題したレポートを書いた時も触れたが、日本で一番高価格株価の会社は「あの」商工ファンドという会社である。ご存知だと思うが、この会社は中小企業専門ノンバンクを標榜している金融業者で、前期の1株当りの利益(PER)が1,800円を超えた日本一の高収益企業でもある。このPER1,800円という数字が如何に高い数字かは、日本の他の上場企業と比較してみると良く判る。この企業の高株価はその高い収益力を素直に反映していると見ていい。

この会社の過去4年余りの株価推移を次の表にまとめてみた。(額面50円)

年度	年間高値	年間安値
95年	20,700円	10,700円
96年	29,600円	18,500円
97年	41,800円	33,500円
98年	47,300円	28,500円
本年	79,000円	35,000円

(97年店頭市場から東証2部へ上場)

今年既に倍となったこの会社の株価推移を見て貴方は何を思うだろうか？

ちなみに、この会社の株式を1000株買うために幾ら資金を用意しなければならないかと云うと、現時点では実に7,500万円程度用意する必要がある(実際は同社の株式売買単位は単位株引下げで10株)。ヤフーという会社の株価が瞬間6,000万円付けて話題になったが、この会社はその上を行っているのである。銀行の株価と比較すれば更に鮮明となるが、都銀トップ東京三菱の約45倍、地銀大手千葉銀行の実に150倍程度の値段がついているだ。

この会社の株価とその推移を見て思う事が幾つかあるので云わせて貰う。

第一に、この会社の株価の軌跡は日本経済の動向と逆比例している。経済が落込んでいるのと対称的な動きを示している。第二に、収益向上に伴って株価が上昇しているとすれば、経済が落込むに従って収益力が高まっている。第三に、それだけの収益を獲得出来るだけの中小企業資金需要マーケットが存在している。そして第四に、銀行

等いわゆる金融機関がこのマーケットに手を出していない、あるいは手を出せないでいる。第五に、この会社の経営者はとても優れていて、金融機関が手を出せないマーケットで確実にシェアと収益を拡大している。

このことは何を意味しているのか？

銀行等の金融機関の平均貸出金利(現在3%程度であろうか、都銀はもっと低い)とこうした中小企業ノンバンクの平均貸出金利(約25%程度)が余りにも開いていて、しかも両者が同じ中小企業を共通の顧客としている事実は、日本の金融システムの歪みを示すものではないかと私は常々思ってきた。何故平均貸出金利が10%前後の金融機関がないのか？

少なくとも、簡便な手続でしかも平均貸出金利10%で資金を供給する金融機関が出現すれば、その金融機関を利用したい中小企業はたくさんあることは間違いない。商工ファンドや日栄があればだけ多くの中小企業を顧客として獲得している事実から、そう考えても不当ではない筈だ。

何故日本の金融機関はそうした需要のあるマーケットに手を出さないのか？

理由は幾つかあるだろうが、一般的には、低金利の預金で資金を集めてそのように高金利で融資するのは公共性の原則に反するというように説明されるだろう。この説明が殆ど建前に近い説明であるのは、投機資金に大量の融資を行ってきた過去の歴史を振り返れば直ぐ判るが、本当の理由は違う所にある。真の理由は、この市場を意識的に無視し、その市場で闘うノウハウを蓄積してこなかったからだ。そして、以前はこの市場を無視しても利益が保障されていたからだ。

今後はこうした市場に参入する金融機関が出てくると思う。ただ今もって現われていないのは本当に残念だ。商工ファンドや日栄が、ここぞとばかり高利益を上げているではないか。需要のある中間マーケットが嘆いているではないか。

日経ビジネス5月31日号によると、5年連続所得を増加させた企業の所得額トップ20社に、こうしたノンバンク(消費者金融含む)が何と9社も入っている。改めてビックリすると共に、こんな事態を出現させてしまった我が国の金融業の現状に気が滅入ってしまった。恐るべき需要と供給のミスマッチが発生しているのだから。